

共著『現代資本主義とマルクス経済学』の主要論点

高田太久吉

I 2007～ 恐慌をマルクス経済学はどのように分析するのか？

(1)1970年代以降の資本主義の歴史的变化を全体としてどのように把握するか？

今回の恐慌を正確に分析するためには、1970年代スタグフレーションから今回の恐慌に至る世界資本主義の歴史的發展を全体的に把握する必要があるが、この点でマルクス経済学は共通の理解に達していない。スタグフレーションの説明。新しい循環の始点。

(2)マルクス経済学の恐慌論にはどのような有効性と理論的課題があるのか？

恐慌分析におけるマルクス経済学の優位点はどこにあるのか。

マルクス恐慌論における見解の相違をどう乗り越えるのか、利潤率低下論と過剰蓄積論。

そもそもマルクス恐慌論と呼べる体系的な恐慌理論は必要なのか。

マルクスはなぜ自らの恐慌論を体系的に記述しなかったのか。

(3)今回の恐慌は、資本主義の恐慌の歴史の中でどのように特徴づけられるのか？

「周期的過剰生産恐慌」概念は現在なお有効なのか。

過剰生産恐慌と「独自の貨幣恐慌」の区別は現代の恐慌分析になお有効なのか。

「グレートモデレーション」と深刻かつ頻繁な金融危機とを一体的に把握する課題。

仕組み証券市場、シャドーバンキング、レポ市場等が今回の恐慌の震源になった含意。

II 1970年代以降の資本主義の歴史的变化と今回の恐慌が浮き彫りにしたマルクス経済学の理論的課題とは何か？

(1)「新自由主義」「グローバル化」「経済の金融化」「IT化と企業経営の刷新」これらの変化を、全体としてどのように関連付け、現代資本主義の正確な「表象」を描くのか？

(2)上記の4つのキーワードは、「独占資本主義」「国家独占資本主義」「帝国主義」「金融資本」他の諸概念とどのように関連するのか？あるいは、逆に、これらのキーワードが表わす現代資本主義の変化は、「独占資本主義」以下の概念のどのような発展を促すのか。

(3)今回の恐慌の予測、分析において、マルクス経済学の立ち遅れ、見解の相違をもたらした理論的問題点はどこにあるのか？資本の過剰蓄積と貨幣資本の過剰、金融化。

(4)マルクス経済学は、ポストケインジアン、SSA派、レギュレーション派、その他の非主流派の「政治経済学」をどのように評価し、批判するのか？とくに、ミンスキー「金融不安定性仮説」の評価と批判。

Ⅲ マルクス経済学の理論的発展の観点から、現代の恐慌研究がなぜ重要なのか？

(1) 恐慌として発現する資本主義の蓄積様式の「豊かさ」とは？

具体的に生起する恐慌は、資本主義のきわめて歴史特殊的、表面的な現象。しかし、恐慌の経済学的分析は、現代資本主義の主要な矛盾、主要な歴史的变化の総体の分析を含まなければならない。今回の恐慌をどう分析するかは、現代資本主義論を前提する。

恐慌を契機に新しい情報と学術研究が激増し、経済学の内容を「豊か」にする機会。

既存の経済理論、恐慌論の有効性と限界が試される機会。理論発展の機会。

(2) 恐慌分析によって、現代資本主義の諸矛盾の焦点が浮き彫りになる。一方における利潤回復と資本の集中、貨幣資本の過剰、所得と富の異常な集中、国際的不均衡。他方における持続的失業、低賃金、貧困、社会的分裂。複合的バブル崩壊。資本と労働の膨大な浪費。資本の競争は資本蓄積を促進し、競争力を高めるが、その結果は、生産力と労働力の膨大な浪費、自然環境の棄損、生活基盤の劣化、経済権力、金融権力の強化。

(3) 恐慌は資本主義の「進化」過程の節目、危機克服と新しい蓄積様式の成立。

具体的な恐慌を歴史的視点から分析することで、資本主義が内的な矛盾を克服しながら発展する「進化的プロセス」が見えてくる。恐慌は、資本主義が、その進化過程で通過する「脱皮」局面。進化プロセスは、厳密な意味で必然性の過程ではなく、経路依存的性格をもち、それ自体としては完成段階や最終目的を持たない変化の連続。自動崩壊しない理由。

Ⅳ 本書で十分に掘り下げて検討できなかったその他の重要な論点

(1) 金融恐慌の分析に焦点をあてているために、現実資本の運動と、それを推進する生産力の発展の側面が不十分にしか取り上げられていない。

1990年代に、資本主義はIT化を始めとする科学技術と経営手法の急激な進展を梃子に、生産力の新しい発展段階を実現したと見られる。グローバル化、金融化、失業・格差問題、世界経済の地殻変動、現代の恐慌の形態変化は、このような生産力の歴史的発展⇒資本の過剰蓄積・競争を基礎に据えて考察する必要がある。(我々の研究会の今後の研究課題)

(2) 東アジアを中心とする一部途上国の経済発展、世界的な生産拠点が先進工業国から途上国にシフトし、多国籍企業の資本蓄積が途上国の豊富な低賃金労働に直接依存するようになった階級的搾取の現状分析が不十分。これと関連して、従来の帝国主義論、独占理論の批判的検討、現代帝国主義の態様をさらに具体的に掘り下げて分析する必要性。

(3) 現代マルクス経済学の方法論的課題をめぐらる問題。

『資本論』の方法と『帝国主義論』の「方法」との乖離は何を意味するか。

弁証法に依拠するマルクス経済学と、進化経済学、複雑系の経済学との関係。